

同時代的視点からのワーズワースとシェリー

田久保 浩

シェリーに対するワーズワースの影響という主題については、ハロルド・ブルームがかつて、*Yeats* (1970) から *Poetry and Repression* (1976) に至る詩人間の影響を主題とした研究の中で繰り返し論じていて、有名である。ブルームの論では、ワーズワースを先達、シェリーを若輩として、若輩が自らの詩人としてのアイデンティティーを確立するため、先達者との心理的な格闘を演じる過程をテキストに読み取るうとする。最近では、キム・ブランクがこの主題を発展させる形で、*Wordsworth's Influence on Shelley* (1988) という本を出している。両者の関係を一冊にわたって論じた唯一の書としてこの研究の意義は大きい、その限界は、両者を取り巻く当時の社会的状況を考察に含めなかった点にある。両者の関係の背景には、ワーズワース、コールリッジ、サジーらのロマン派第一世代と、シェリー、バイロン、ハズリット、キーツら第二世代との間の主として政治的な対立があり、シェリーのワーズワースについての発言の多くも両者の政治観の相異を反映するものである。シェリーにおけるワーズワースの影響を、作品のフォルマリスト的解釈からのみ論じるのではなく、両者の作品の歴史的、社会的コンテクストを意識するによって、シェリーがワーズワースをとらえる視点は一つの窓となり、そこを通してシェリーの同時代とのかかわりが広く見えてくるのではないだろうか。そしてそこからシェリーにとってのワーズワースの重要性についても新たな認識が生まれるであろう。

ワーズワースの詩に傾倒していたシェリー

のワーズワース観を大きく揺るがしたのが1814年にワーズワースの出した *The Excursion* である。メアリー・シェリーは同年9月14日付の彼女の日記にこう記す。「[シェリーが]家にワーズワースの *Excursion* をもって帰る。

その一部を[二人で]読む。とてもがっかりした。彼[ワーズワース]は奴隷だ」。彼女はシェリーの意見を代弁していると考えられるが、彼は、ワーズワースのこの大作に表れた、人々の苦しみを顧みない現状肯定の態度、またフランス革命後の失望を癒すために信仰を勧める態度などに、現体制に追従する姿勢を見いだして憤慨したもの

と思われる。

シェリーのワーズワース観を特徴づけるのは、*Lyrical Ballads* (1798-1802) を始めとするワーズワース初期の詩に対する心酔の念と *The Excursion* (1814) 以降のワーズワースに対する批判の念との対比である。そのことをよく表す資料は、1818年に彼の友人ピーコックに書き送った手紙である。同年の総選挙において、ワーズワースが自分のパトロンである王党派のラウザー家の候補の選挙運動に積極的にかかわったことを報告してくれたピーコックへの返事にシェリーはこう書く。「何というひどい、情けない奴なんだろう、あのワーズワースという奴は。あんな男があのような[すばらしい]詩人であるとは。彼に比べられるのはシモニデースだけだ。あのシシリアの暴君たちのおべっか使いで、同時に最も真情溢れる叙情詩人の。」こうした、詩と人

注 ワーズワースの肖像画「自然と幻想」岩崎豊太郎著
こびあん書房 1992年より

物の評価の分裂したワーズワース観は、キーツやハズリットとも共通するものである。キーツも、ワーズワースの詩を敬愛し続けながらも、ワーズワースが上司の税務官にへりくだった態度をとるのを見たり（ワーズワースは印紙を扱う税務の職についていた）、彼の反動的な政治観や、ラウザー家の選挙運動へのかかわりなどについて耳にするたび繰り返し幻滅を味わった。ハズリットも、若いころはワーズワース、コールリッジと個人的に交わり、彼らの熱烈な信奉者であったが、1810年代の後半には、彼らのことを自由の理想を裏切って政府側についた転向者として攻撃する記事を繰り返し書くこととなる。

それではシェリーらにとって、ワーズワースの初期の詩の中の何が重要だったのだろうか。ちなみに、シェリーは1807年以降のワーズワースをまったく評価せず、またワーズワースの『序曲』は1850年まで出版されなかったため、シェリーのワーズワース評価は *Lyrical Ballads* と1807年の『詩集』のみによるものである。にもかかわらずシェリーにとっての、詩人としてのワーズワースの重要性は疑いえない。そのことをよく表すのが1816年の『アラスター』詩集に収められた "To Wordsworth" というソネットである。これは彼が *Excursion* を読んだ際の失望の気持を、ワーズワースという詩人を失った悲しみとして歌ったものと考えられるが、その中で、ワーズワースをこう讃えている。

Thou wert as a lone star, whose light
did shine
On some frail bark in winter's mid-
night roar:
Thou hast like to a rock-built refuge
stood
Above the blind and battling multi-
tude:
In honoured poverty thy voice did weave
Songs consecrate to truth and liberty,--

ここで強調されているのは、冬のような逆境の時にあってワーズワースは一人輝く孤高の詩人であったという点である。"some frail bark" とはシェリー自身であり、その夜の荒海にさまよう小舟を導く北極星がワーズワースであった。『アドネイス』においてキーツを明星として、やはり小舟にたとえられる詩人の魂を導く光とする比喩の原型はすでにここに見られる。

19世紀初頭が逆境の時代とされるのは、当時イギリスはナポレオンと争う戦時下にあり、フランス革命時に開花した自由思想や政治改革運動は、ほとんど完全に抑さえ込まれてしまっていたからである。その中にあってシェリーは十代の頃から、トマス・ペインやホルバツハ、ゴドウィンらの、禁書になっているか、あるいは一般には忘れ去られた本を探し出しては熱心に読んでいたと思われる。そのシェリーを夢中にさせたのがワーズワースであった。 *Lyrical Ballads* を書き始めるまでにワーズワースはすでに共和思想や革命思想とは決別していたとするワーズワース研究者は多い。しかしシェリーの「真理と自由とに捧げられた歌」という言葉は、彼がワーズワースの詩のなかにある種の革命思想を認めていたことを意味する。ではそれは、いかなる意味で革命的なのであろうか。

ワーズワースの大詩人としての一般的認知を遅らせた最大の敵は、 *Edinburgh Review* の編集長で当時最も影響力のある批評家であったフランシス・ジェフリーである。そして彼がワーズワースを批判するのに用いたレトリックは、彼の詩をジャコバンの民主主義や革命思想と結び付けることであった。ジェフリーは、ワーズワースが *Lyrical Ballads* 初版につけた前書きで、それは社会の中、下層の人々が会話に使う言葉がどれだけ詩の言語として用いられるかの実験であると述べているのに目を着け、それを現存の文壇の秩序をくつがえそうとする謀略であると非難する。また彼

は、洗練された人の愛や悲しみの感情は、庶民のそれとは本質的に異なるのだとも主張する。そしてワーズワースらによる、庶民に自分らを表現する詩を与えようとする試みを、トマス・ペインの、民衆の不信や不満を扇動しようとする試みと比べて論じる。つまりジェフリーが恐れたのは、ワーズワースの詩が、イギリスの階級制度の弱体化を促すことにあるのである。こうした民主思想は、シェリーの“The Mask of Anarchy”とも通じるものである。だが、シェリーがワーズワースに傾倒した理由はこれだけではない。

もう一つ、ワーズワース初期の詩の革命的要素として指摘したいのは、自然や社会の諸々の変化を許容する姿勢である。たとえば“Tintern Abbey”のなかの有名な箇所ワーズワースが自らを動かす力を感じると言っているところがある。

A motion and a spirit, that impels
All thinking things, all objects of all
thought,

And rolls through all things.

ここでは考える主体もまた、宇宙のすべての事象を絶対的に動かす大きな力の前では小さな存在に過ぎず、ただその力を受け入れるのみである。それゆえワーズワースは、この詩

の最後で、自分がもはやこの世にはいない時のことを想像しながらも、愛する妹の記憶のなかに自分たちの自然との経験を残したいと願う。つまり自然の流れの中で自らの死をも変化の一部として受け入れる姿勢である。これはシェリーの必然論における、自然の法則、歴史的な時代の流れの法則の認識と一致する。たとえば“Ode to the West Wind”において、自らは朽ちてゆく一枚の木の葉に過ぎなくとも、変化をもたらす西風の力を受けて、新たな思想を育む糧となろうとする決意に、それは見られる。この変化の法則こそ、社会の変革を求める理論の基礎である。しかしながら、後のワーズワースは、この変化を頑迷に拒否することで初期のワーズワースと明らかな対比をなす。自らを動かす自然や歴史の大きな力を感じなくなることは、詩人にとって致命的であるとシェリーは考える。彼が後期のワーズワースを否定する理由はここにある。

そしてシェリーはこの後、“Verses written on receiving a Celandine,” “An Exhortation,” *Peter Bell III*といった詩の中で繰り返し、なぜワーズワースが墮落してしまったのかと問いかけることとなるのである。

(関東学院大学非常勤講師)

シェリーのイタリア

本田 和也(文教大学文学部教授)

去年の夏の終わり、日本シェリー研究センターが主催したイタリア旅行に参加し、シェリーのゆかりの地を訪ね歩くことが出来た。幸い地中海の青い空を満喫できる晴天続きだった。ベニスのリド島には「ジュリアンとマラド」の詩の一節に思いを巡らせ、フィレンツェにはシェリーの住まいのあとを、アルノ川沿いに訪ねた。“Florence, beneath the sun, Of cities fairest one.”と詩人が「ナポリ頌歌」のなかで歌っている所だ。その通りの美しさだった。そこはぼくにしても20年ぶりの再会だった。さっそくウイフィツ美術館にポッティチェッリの「ヴィーナスの誕生」、「春」やラファエロの「かわらひなの聖母」を見た。落ち着いた色調に遠いルネッサンスの永遠をふと思った。移ろう時間などはそこにはなかった。そんなことを考えながら、澄み切った空の青さのなかに出ると、町は建物が濃い陰影を交差させている。アルノ川は静かに流れている。ぼくは花の聖母寺の別名のあるドゥオモの前に出た。その石の美しい柔らかい色合いはどうだ、どこまで淡い軽やかな色つやなのだ。目にやさしい色調には、正直参った。ぼくたちはエステ、アッジの聖フランシス、ナポリ、ボンベイ、詩人終焉の地 Viareggioと巡り、キーツとシェリーが眠るローマのプロテスタント墓地を訪ねた。